

新しき村余録（中）

—— 中村亮平伝 ——

今井信雄

日向の「新しき村」へ赴こうとしている（大正八年四月十日）中村亮平が、螢が飛んでいる「村」と、車窓に眺める大雪とに、改めて遠い南の国を意識して、感傷に浸りきっていたことは既に記したところである。感傷には違いないが、中村の心情には、人をして充分納得させる点もなかったわけではない。

「新しき村」の年表（雑誌『新しき村』所載、昭三十五・十二月号）で、「村」に住んだ人々の記録を見ると、一年次の大正七年には、大人十七人（内、男十四）、子供二人、計十九人。家族数三とある。中村が入村した翌八年は、大人二十八人（内、男二十二）、子供四人、計三十二人。家族数

六と記載されている。この三十二人の中に、家ぐるみ入村した中村の家族五名と、彼と行を共にした塚原健二郎（後の童話作家）が含まれているわけである。中村家の家族構成は戸主亮平（満三十二才）、妻みさは（二十八才）、長女みい（三才）、二女道子（二才）、それに事情があつて養育していた中村の甥治平を加えての五名であった。これだけ大人数の家族入村は、前年はもちろん、後にもその例を見なかったことと思われる。家族ぐるみ入村ということになると、入村前に幾つかの身辺処理の困難な問題と、尋常一通りとは思えない決意が必要とされた。

中村亮平夫妻は共に師範卒の本科正教員であつたから、行く手は平坦な道であり、一応その生活も保証されてい

た。殊に亮平の場合は、教職に就いてから八年を経過、既に恩給年限の半ばを勤め、年功加俸もついて、主席訓導の地位は目の前にあった。更に、中村を語る人の誰もがいうことではあるが、彼は先祖伝来の田地田畑と、その家屋敷のすべてを売り払い、一つ残した墓地さえ、適当な時期に日向に移そうとしている。目ぼしい家財・寝具は入村前に「村」に寄付しているから、文字通り素裸になって「村」へ走ったということになる。周囲の反対、特に妻の里方の猛烈な反対のあったことはいうまでもない。

彼は三反歩程の水田と、約二反歩の畑を二千円で知人に、家は三百坪の宅地付き千円で隣家に売り払っている。売り方は無欲であり、無雑作であった。金銭については、極めて恬淡であった武者小路ですら、我孫子根戸の家の売却については、中村よりずっと世間並みの常識家であった。売る条件や潮時を志賀直哉に一任した後、日向に出掛けている。武者小路の持ち金三千四、五百円のうち千円は兄公共、千円は大阪の篤志家茶谷次郎から贈られたものであるから、武者小路が初めから持っていた金額は、四、五百円にすぎなかった。武者小路の家が売れたのは大正八年六月で、「村」の第一年目に当たっている。

根戸の家売れた、明後日本統にハッキリする、価は君に無断ではあつたが五千五百円から百十円までやる事にした(中略)それから僕はその内から君のいつてゐたように千円だけ貰ふ(後略。原文のまま)

六月二十二日付、志賀より武者小辞宛の書簡である。「一人の男」(雑誌『新潮』所載。昭四十三、四月号)に武者小路が「僕の我孫子の家が売れて、四千三百九十円の金が入った」とあるのは、志賀への礼金と、まけてやった百十円をさ引いた残金である。中村の生まれた古い農家と、武者小路夫人の絵図面をひいた、新築二年そこそこの文化住宅とは、売価に相違のできたことは当然としても、三百坪の宅地付き千円は、当時としても格安の値段であつたろう。

中村が家屋敷を処分した金三千円を、どう使ったかは、彼自身口を緘して終生語らなかつた。十数冊にわたる美術関係の著書にはもちろん、自伝小説『死したる麦』でも触れていない。また、後年、鷲の宮高校で彼と親しかつた同僚にも、武者小路に対する尊敬や、かつて村にいた想い出を語ることはあつたが、その全財産が「村」に投入された事実については、ついで一度も触れたことはなかつた。本人は語らなかつたが、かえって武者小路の側から、その金

が「村」に費されていることが明らかにされている。後に中村が離村する破目になった時、中村を送る武者小路の一文が『新しき村』（大九・九月号）に載っている。

（前略）自分はここに中村君が村に入る時、先祖からの家や畑を売って二、千円以上、村に提供して、当時金のなかった村を助けたことのあることを改めて書いておく。同君の今後の幸福を祈る。村でも余裕が出来たら、その為にく分でもつくしく思っている。

（傍点筆者）

また『一人の男』（『新潮』所載。昭四十二・二月号）には、次のように書かれている。

村へ入るために特に金を出した人、全財産を出した一家は一つしかなかった。僕はその人の財産をいくら村が受けとったか知らない。しかしその人が村に入るために自分の田畑や家を売った事は聞いている。そして村に小さい家をたてて、そこに住む事になったのを知っている。その人は信州の人で、中村亮平君だった。村式に言えば中村亮平兄一家であった。

中村君は（中略）村を去った。去った時も僕に少しも不快な感じは与えなかった。僕の方で気の毒をした気がした。それから僕は、自分の田畑を売って村に入る人は断りたい気になったのは事実だが、幸いそういう人は二度と出なかったようだ。（原文のまま）

『一人の男』で、「いくら村が受けとったか知らない」といっているのは、『新しき村』で中村が「二千円以上」寄付したと書いたのを武者小路は忘れてしまったことと思われる。

さて中村は、「村」へ二千円余りの寄付をし、残余の金は石河内下の城に七坪の家を建てて、すっかり使い果している。しかし、その家も結局は「村」へ遺して離村しているから、中村は全財産を「村」に投入してしまったことに間違いはない。もっとも入村後は、小使い銭を含めて中村家の生活費、病気のため青島に転地した中村の療養費、離村して帰郷した日の旅費などは、「村」からの支弁を受けている筈である。

今日になってみると、当時の二千、三千という金額の貨幣価値については、理解し難いところであるが、「村」で買い入れた馬が百七十円、荒蕪地ではあったにしろ、「城」

の地は一反歩平均五十円で購入できたから、「村」が初めて手に入れた畑地一町歩、草地傾斜地三町歩余り(この道所載。昭三十五・十二月号)は、二千数百円で全地積が購入できたことになる。また中村亮平の初任給は十八級下俸、金額にして十九円であり、八年間勤めた退職金は、「市町村立小学校教員隠退科及家族扶助料法」に基づき、百四十円を支給されただけである。人には語らなかつたが、田地畑、家屋敷を売却した金の中に籠る先祖の汗の意味を中村だけは充分に認知していた筈である。

塚原健二郎の自伝小説『小さな河』に、次のような一節がある。

中村は机の上から、いく枚ものかわせの送金票をとって、いくらか自嘲的な調子で「一枚二枚三枚」とかぞえた。私は、中村が千曲川べりの家売った金の最後の分を「村」へ送ったのだなと思つた。中村は夫妻そろつて、十年にわたる教職を捨てたばかりか、家や土地までもその理想のためになげだそうとしている。

「自嘲的な」とは、理解しかねる表現だが、この金の重みを知りすぎるほど知っていた中村の、逆説的感慨だと受

ければ解らないこともない。

「新しき村」に身を投じた人々は、総じて坦坦とした人生行路を歩いてはいない。しかし、大部分は二十才前後の独身者か、若い夫婦者であつた。その点、中村亮平の入村程、大がかりで徹底した形をとつた者は外にいない。それだけに、中村の入村を見送ろうと、さまざまの人の顔が駅頭に、車窓に集まつた。任地松代町の立場(乗合馬車)は、馬場源六(前出)等をはじめとする支部の仲間、親戚・教え子・父兄の群れでごつた返した。塚原の姉は、動き出した馬車を追つて、弟の身の上を幾度か中村に頼みこんでいる。また、そんな人々の群れから少し離れて、かつて塚原と淡い交渉を持った女性の見送り姿も見られた。篠の井の駅頭では、中村の生まれ故郷、埴科郡五加村から親戚の代表五、六名が押しかけ、連れて来た写真屋に記念写真を撮らせている。「中村家にとっては、それほどのできごとだつた」とは、『小さな河』の中に出てくる一節である。篠の井の次の稻荷山駅では、宮坂栄一(前出)、教師仲間の島田久平、姥捨からは「村」の同志であり、師範時代からの盟友であり、後には義兄弟の縁にもつながつた中村常雄(後、上田市図書館長)が同車して、塩尻まで送っている。その塩尻の駅頭には小林多津衛(前出)が、——野外写生と

でもいって連れ出したのであろう——多数の学童を引率して声援を送っているし、洗馬の駅頭には松島八郎（前出）が待っていた。まさに出征兵士なみの騒ぎであった。おそらく、中村を送る同志の心の中には、中村に対する讃仰と羨望の入り混った気持が動いていたことであろうし、親戚一同の胸中には、委しい事情は呑みこめぬまま、昭和期のブラジル移民でも送るに似た心情が働いていたかと思われる。そして見送りを受ける中村の身辺には、人類の栄光を切り拓いて進む選士にでもなったような颯爽とした雰囲気と、血縁知人に別れを告げ、故山の風物をも捨て去ろうとする感傷的な悲愴感が漂っていたのではあるまいか。

私は前に、西下する車中であつたの中村の感傷には、無理からぬものを覚えると述べたが、如上の事どもを並べたててみると、改めてその心情に、強い共感をさそわれずにはいられない。

二

中村亮平は明治二十年六月十九日、長野県埴科郡五加村大字上徳間（現、戸倉町）の農家中村清左衛門の三男として生まれた。五加小学校の記録によると、尋常科三年生終了に当って、『絵入り日本歴史』一冊を精勤賞として受賞しているから、小学校時代は健康には恵まれていた少年であつたに違いない。明治三十年四月一日、高等科第一学年入学（当時の尋常科・高等科はそれぞれ四年制）、保護者は兄の吉三郎になつてゐるから、父清左衛門との死別は尋常科時代ということになる。明治三十六年、戸主吉三郎の死にともない、母みねの選定によって家督を継いだ。年令は十六才で、高等科を卒業してから二年を闊している。次兄憑平は生存していたが、家督を継ぐには堪えられない健康状態であつた。前記、甥の治平は憑平の子である。

中村の長野師範入学（一部）は、明治四十年で、卒業は四十四年の三月になつてゐるから、小学校高等科卒業より、師範学校に入学するまで六年の空白期間を持ったことになり、その時数え年で二十一才という勘定になる。二十一才は徴兵年令期に相当しており、師範学校入学許容年令ギリギリの年に當つてゐた。師範に入学するに至つた六年

間を、中村がどう過したかについては、それを窺うに足る資料も、その間の事情を語る人もなく、今になってはその手掛りは得られない。ただ、中村亮平の生涯を顧みて、この間の実情を推定することは、さまで困難なことではないが、後述の機会もあるので稿を改める事にしよう。

彼と同期の卒業生には、信州白樺派からキリスト教徒に転じ、後には東筑摩郡の教育会副会長になった矢島麟太郎、小中学校校長を歴任し、後に県社会教育課長になったアララギ歌人伝田精爾、同じくアララギの歌詠みで、後に松本中学（現、深志高校）校長になった清水謙一郎、有島武郎を招いてホイットマンの継統講義を幹旋した、後の北佐久郡教育会長山本武雄がいた。西尾実・金原省吾・大池蚕雄（東筑摩郡教育会長）・伊藤泰輔（上伊那郡教育会長）・塚原葦穂（諏訪郡教育会長、島木赤彦の弟）・笠井三郎（前出）は一年以上のクラスであった。また一年下のクラスには、キリスト教に帰依した、現信濃教育会長松岡弘、信濃哲学会の創始者の一人菅沼知至等がいた。雑誌『白樺』を常時ふところにし、一志茂樹（前出）に初めて同誌を紹介した片瀬^{まかん}、^{まかん}「新しき村」信州支部長（二代）島田茂穂等の顔も見えている。まことに多彩な顔振れで、長野師範学校卒業生名簿のなかでも、特に矚目に価する一時期であった。大正十年頃

の信州教育界は、白樺・キリスト教・アララギ・西田哲学が、撫で合い振り合って錯綜していた時代であるが、それら運動の中心人物は、何れも明治四十四年前後の、長野師範の卒業生達であった。

師範生時代、中村亮平のもっとも親しかった友人は、前記中村常雄である。「死したる麦」には岡村の名前で登場する人物で、更埴地方の信里・五加・戸倉の校長を歴任、退職後は上田市立図書館長を勤めた。一かどの見識を持つなかなかの人物で、絵画も本格的な勉強をされており、中央の展覧会にも入選するほどの画倆を具えていた。両中村は連れ立ってよく絵を描き歩いた。二人の若い日の写真を見ると、当時の画家スタイルとでもいうのであろうか、頗る珍奇な姿で写し出されている。自由主義の傾向にあった者は、好んで絵を描いていたように思われる」とは、當時を語る人々からよく聞く言葉であるが、この場合の自由主義者とは、『白樺』の愛読者が、乃至はそのシンパを指す同義語に外ならなかった。後に中村亮平は美術の教師として教鞭を持つことになるが、そのなり方は、随分不自然で、無理な努力をともなっていたような気がする。中村の履歴書を眺めると、彼はこの世の中で、何にも増して価値の高いものは芸術であり、その仕事に携わることこそ、も

つとも願わしかるべき人間の相だと考えているふしが窺われる。そしてその確信は、師範生時代に培われたものであり、その素地を提供していたものが雑誌『白樺』ではなかったかと思われる。善悪可否の問題は暫く措くとして、よかれ悪しかれ中村亮平とは、『白樺』の影響を終生免れ得なかつた人間である。

中村亮平の教師歴の振り出しが、埴科郡南条小学校であったことは、既述したところであるが、中村の年令はその時、満二十四才になっていた。南条小学校に在職すること二年で、母校五加小学校に転勤、月俸は十八級上俸（二十円）を支給された。同じこの年、松本女子師範卒業の山本みさほが五加に赴任している。山本みさほは中村の初めの夫人である。みさほの五加在職はわずか一年で、翌年の大正三年には同郡清野小学校に転任になっている。これは、両人の恋愛問題が周囲の人の口の端に上り始めていたからであろう。二人の結婚については、山本の家の方から種々の難色を示された。中村家はせいぜい中農程度の農家であり、山本家は松代藩士で、象山の生家など「佐久間の家」と呼び捨てにしていたような家柄であった。みさほの長兄信夫は医師で、名付け親は碩学長谷川昭道であり、次兄義夫は東京文理大に学び、後には東京都の視学を勤めてい

る。森鷗外の二男、類の家庭教師になったのはこの人である。家格を重視した当時の地方にあっては、山本家がこの結婚に反対したのは当然の事といえよう。しかし、中村らしいひたむきな求婚によって、この話は一応実を結ぶことになるのだが、みさほの母は後々まで、娘が五加の農家に嫁したことを悲しがっていた。

五加の小学校に約二年半いた中村は、大正五年十月、小県郡上田（現、上田市）女子尋常小学校に赴任している。月俸十七級下俸、二十三円であった。中村が一女の父となつたのはこの春のことである。上田の生活は一年半で、大正七年の四月には再び埴科郡に帰えり、松代の小学校に教鞭をとっている。月給は十七級上俸（二十四円）で、中村は満三十一才、二女の父親になった年である。前に中村の住居を、松代町代官町の武家屋敷と記したが、その武家屋敷がみさほの生家で、「新しき村」の信州支部はここに置かれ、「村」に心を寄せる人々の梁山泊にもなったわけである。

中村亮平が村内会員として「新しき村」にいたのは、大正八年の四月十五日から翌九年の七月二十日頃までであるから、在村したのは満一年三か月で、この間に青島の療養生活二か月半が挟まる。あんなにも「村」に打込んでいた中村亮平が、在村期間も短く「村」を出てしまった経緯については、後に触れるつもりであるが、打込み方が大きかっただけに、その袂別はまた惨めであった。

入村時に五名であった家族は、「村」で生まれて、武者小路に命名してもらった泰子を加えて六人になっていた。泰子は生後四か月の嬰兒であった。日向入りの日には、中村一家の外に所用のため上京していた武者小路、それに兄弟七人が一緒であった。兄弟の中には千家元麿の顔も見えていた。宮崎市のプラットホームでは遠路を出迎えてくれた「村」の兄弟達と帽子を振り合って「汽車がとまらないうちに喜び合い、ある感じに打たれてマイッテしまった」想い出がある。「妻」の駅では、さらに多くの村人の歓迎を受けた。それが今度の帰郷には、ただ一人の同志に送られているのみである。一行は峠を越え、さらに何里かの道を黙々として歩いた。大人三人は、それぞれ背中に女

の子を背負い、手一杯に荷物をさげていた。見送ってくれた同志と最後に交わした挨拶は、「どこにいてもかまわなから、お互いの存在意義をハッキリさせよう」ということばだけだった。車窓に倚って眺める駅々の幾つかは、入村時の感傷とは裏返しの恰好をとって、中村の心中を去来した。「小林」の駅は土地探しの日、郡役所や町役場の人に出迎えられた町であるし、「博多」の町は、講演会の想い出と、倉田百三に会って感激した町である。「死したる麦」に書かれている中村の心情は極めて感傷的である。入村の日には、京都・大阪・神戸と次々に大歓迎を受けたが、今日は前もって報らせておいたにもかかわらず、夜半ではあったにしろ、大阪でただの三人、京都では一人の兄弟の姿も認め得られなかった。中村にしてみれば、かつては肉親にもまして心を領ち合った兄弟達であったから、一言別れの挨拶をしたかったようである。

しかし、中村のどんな淋しさや惨めさにも増して、もっともつらかったのは、その故郷入りであったと思われる。五加の家を既になくしている現在、中村が「まず落着かせてもらおうとしている家は、入村に反対し続けていた妻の実家しかなかった。降り立った篠の井の駅は、一年前、親戚、知友、教えずに「今や、太陽に向かう人」といった

眼指しで見送られた駅である。墓さえも移そうとしていたからこそ、知友の饑別も受けて出掛けたのである。ところがこと志と違い、おめおめとふるさとの地を再び踏んだ、その負い目に、彼の足はさぞ重かったことであろう。「死したる麦」を誦むと、自分は恥ずることなく「村」で生き抜いたと自己の行為を肯定し、つとめて胸を張ろうとしてはいるが、矢張りふるさとの駅は、彼にとつて踏み越え難い敷居であったに相違ない。彼も述懐しているように、村人や親戚の者からは「この食いつめ者め」の目を、また彼のかつての同志からは、バツの悪い、困惑の目を意識させられた。

二十六日昼頃帰えるという電報に愕き、事情の分らぬまま駅に駆けつけた中村常雄夫妻は、着のみのままで降り立った一行の姿をみて、常雄の妻かほるは泣けてたまらなかつたと語っている。かほるは亮平の妻みさほの妹である。「死したる麦」にも、無帽の中村と、薄汚いブラウスをまとい、一束の髪と度の厚い近眼鏡をかけた妻とは、まさに恰好のチャイニーズの一对であつたと書いている。この頃の無帽は、普通人のスタイルではなかつたものと思われる。門司では列車ボーイに、「大連へですか、釜山へですか」と問われたとある。明日からの生活費にもことを欠

いていた亮平は、中村常雄から百円余りの金を融通して貰い、松代の町へ帰っていった。

中村の帰郷は、当然予想できることであるが、信州の會員の間に多少の動搖を与えた。「新しき村」(大九十二月号)の「六号追記」に武者小路は、▲信州の未知の人からこういうハガキが来た(中略)我が中村兄もついその名を第二種會員からも除こうとしている。おお、どうすればいいのです▼という一文を掲げ、▲僕を信じる▼なら、▲百の中村君▼がでて、▲千の中村君▼がでてもおどろくことはない、▲安心していらっしやい▼と、説明とも説得ともつかない声明文式のものを書いていく。同じく信州のある女教師は▲全くパラダイスのように思っていた▼もの、▲今まで積み上げてき、実に大切にしてきた▼ものが、▲一ぺんにくつがえされてしまった▼と、その嘆きを訴えている。この点において、中村の帰郷は、一部の人の「村」に対する情熱に水をさしたことは慥かである。しかし、信州支部そのものには、たいした影響も及ぼさないで済んだ。理由は、この頃の支部責任者は前記笠井三郎で、支部の所在地も北信から南信の上伊那郡南箕輪村に移り、「村」の関係者が多い北信地区とは遠く隔っていた。それに笠井は、もともと「地上」系の白樺派で、北信の「村」系統の

白樺派とは無縁なところから出発していた。いわば芸術愛好派のサークルに属する人であり、「村」よりむしろ「教育」に関心を寄せる人であった。だから「村」に対する懷疑や批判があちこちから起っても、その屋台骨をゆさぶるような問題には発展せずに終わったのである。

横道にそれるが、笠井にしても次代の支部責任者小川久喜にしても、一応責任者としては、誠実でその人柄にふさわしい努力を「村」のために傾注しているのだが、それはあくまでも第二種会員としての努力で、一種会員として自分が入村することではなかった。責任者としての使命を遂行させていたものの実体は、武者小路に対する個人的な尊敬と、理想郷をこの地上に実現させようとしているその思想に対する共鳴感からである。ただし彼等にあつては、その理想郷の実現は、「村」よりむしろ「教場」にあつたことは、今までもしばしば述べて来たところである。学童とどうしても別れられない彼等としては、「村」に向向くのではなく、「村」の精神を手許に引き寄せ、その精神を教育の場を実現させる点にあつた。今井久雄の日記(大十・十・二十五)が、この間の事情をハッキリ説明してくれる。

今日有賀⁽²⁾から学校の原稿⁽³⁾ニニュースクール⁽⁴⁾が到着、素適

だ。それを読むと僕等の理想が現在すでに実現されている処があるのだ、素適だ。これを見て、武者氏の講演がますますハッキリ心に食い入ってくる。

小供⁽⁵⁾から離れたら何の甲斐もない。無意味だ。今の自分⁽⁶⁾は、小供たちのために生かされているのだと感ぜずにはいられない。来るべき時代の小供のことを思うと、たまらなくなってくる。

△これを見て、武者氏の講演がますますハッキリ食い入る▽という意味は、武者小路の講演内容に、今井の仲間が夢みていた理想の学校像を重ね合せて考えていたのである。『或る男』の中に次のような一節がある。

彼は二年前まだ小石川にゐた時に、彼は『或る国の話』と云ふものを書いてゐる。それには彼はかうかいてゐる。ある国に行つて帰つた人の話だが、その国では、すべての男が小学校に入ると同時に生産的な労働を教へられる。一週に二・三時間、大工の稽古をしたり、百姓の稽古をしたり、陶器をつくる稽古をしたりする。中学の上にゆくと工場の見ならひにゆくことも

ある。頭のわるい者は労働学校へ入れられる。ある特殊な労働を好むものはその方の稽古をすることを許される。そして一定の年令になると、一日の内に二時間乃至六時間一定の労働をする義務がある。それはその人の体質と、興味と、労働の種類によつてきめられる。特殊の才能あるものはその方面に働く。そして手柄、何か有益な発明や発見や、或は学術上、文芸上、人道上に何か手柄があると、労働の時間は減ぜられ、又は免除される。又選挙によつていろいろの事務をとるものも労働は許される。そのほかの人は医者やの診断か或は特別の事情のある外は一定の労働だけはしななければならぬ、その上は自分勝手なことが出来る。

(原文のまま)

『或る国の話』は、大正六年六月十五日に書きあげ、雑誌『太陽の都』に掲載されている。武者小路の抱いた理想の国の断片で、後の『新しき村』に発展する原初的な考えと見なされる。この発想で興味がかかる点は、武者小路の抱懐していた理想郷の端緒に、学校問題が取り上げられていることである。ところが『或る国の話』に語られた構想の本筋に、『村』建設の骨子として教育問題が取り入れ

られていたにもかかわらず、いつの間にか『学校』の部分の後理想の『村』の構想の中から、欠落している。それは『村』に学童の数が少なく、ために教育問題についての与論の醸成が乏しかったためか、あるいは自給自足による生活の独立をはかるのが急務で、不急な教育問題などには手が廻らなかつたためかも知れない。『村』の電化の夢は持つても、『村』の次代を育てる教育問題には無関心だつたようである。『村』の就学適令期の子供は、みな木城村の学校に通わせていた。しかし、この問題は、『村』の大成という見地から考えると、存外重要な問題かと思われる。

現在の『村』(埼玉県入間郡毛呂山町)が、自分達の子供の学校教育についてどう考えているか分らないが、『村』と学校教育の在り方については、今日も依然として『村』に課せられた重要な問題であろう。

さて、『新しき村』の構想に欠落した『学校』の部分を取り上げ、『新しき学校』(『地を嗣ぐ学園』)の創設を企てたのが『地上』系の一部の人達である。だから、中村亮平及び彼につながる『新しき村』系の人々の中に、脱落あるいは動揺が見られても、『地上』系の信州白樺派には、たいした影響はなかつたわけである。むしろ、中村の方に非を見て、武者への結びつきはますます固くなつたようにも

思える。

中村が「村」を出た翌年、大正十年十月二十三日に武者小路は「新しき村」についての講演を長野で行ない、同夜宿舎藤屋旅館で「地上」の人々と夕食をともにしている。

《席上、以前の「村」のことが話題になった。くだらない人間の批判や何かで興奮する。本当に信州から本気の人が行かなければいけない事を痛感する》と今井久雄の日記は記している。《くだらない人間》とは、中村亮平を指していることは明白である。つまり、『地上』派系の人々の、中村に対する態度は意外に冷たかったわけである。

四

中村が帰郷して、間もなく信州一帯は暑中休暇に入ったわけだが、結局中村は、教壇に立つことを決意し、休み明けを目当てに就職運動を始めた。しかし、この運動はスムーズには運ばなかった。彼自身も「かつて標榜していた主義が障っていた」と語っているように、主義はともかく、

白樺教員であったというレッテルが、纏まりかかっていた話を何度かぶち壊している。今度こそはと希望の持てそうな話も、校長・村長・視学のどこかで頓座してしまうのが常であった。漸く伝手を辿って勤めることのできたのは、北安曇郡八坂村の辺鄙な分教場であった。夫婦ともどもの赴任で、辞令は大正九年九月三十日、資格は代用教員、月俸は六十円であった。小学校教員の低額所得は、大正七年からしばしばは議会で問題になり、平均二十五円増俸と可決されたが、実施は各県まちまちで、長野県がこの増俸案を施行したのは八年の終りであった。ために師範の新卒は初任給二十五円から一躍五十円にはね上った。中村の給与は、新卒よりわずか十円高ということになる。それでも資格の方は、翌年の四月二十六日付で本科正教員に返り咲いた。

また、この年の五月、十二月と相次いで彼の著述が刊行された。『芸術家之生活』『柊の花』と、『聖者の生活』『荒野の光』がそれである。何れも二百五十頁前後、収録写真二、三十枚の四六版で、洛陽堂から出版された。前著は木村莊八序、清宮彬の装幀である。芸術家とは、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ゲーテ、ベートーヴェン、ミレー、セザンヌ、ゴッホ、トルストイ、ロダンの

九名である。「荒野の光」は倉田百三序曲、装幀は同じく清宮彬、聖者はキリスト、フランシス、仏陀、親鸞、孔子である。度々引用した自伝小説『死したる麦』の出版は、翌十一年九月であった。四六版の五百八十九頁の長篇で、殆んどは「村」との交渉を書き綴ったものである。

この年の四月、中村は八坂小学校から同郡会染あいで小学校に転任しているが、ここでまた中村は、彼にとって第三の転生期に遭遇することになる。中村が会染に転勤すると同時に、四番目の子供を身籠ったままで、妻のみさほは、三人の子供の面倒は里の母に見て貰い、自分は松代町西条小学校に赴任した。妻と別れ別れになった中村は、会染から三軒程離れた養魚池の小屋を借りて自炊生活に入った。中村家の生活自体も不自然な態勢をしいたものだが、鯉池の番小屋生活も随分風変わりな生活をしたものである。それは中村の好みだと評する人もあるが、無一物になって、これから四人の子供を養育してゆかねばならなかった夫妻の、最低限に切りつめた生活態勢と見るべきであろう。

中村がこの会染の生活に入って間もなく、中村は後の夫人になった生田美和と知り合うことになる。中村にとって第三の転生期とは、この邂逅を指すのである。美和は中村より十八才下であるから、当時満十七であった。彼女は松

本女学校（現、蟻が崎高校）を卒業し、その直後、西田天香の一灯園に走っている。△人間は何のために生まれて来たのか▽、△人生は如何に生きるべきか▽に思い煩う女性の一人であった。同村の務台理作が、美和の生家からの依頼で、美和に帰宅を促すべく出向いても、彼女は△自分を本当に生かし抜くことこそ、最高の親孝行だと思っている旨を両親に伝えて欲しい▽と言いつ切る女性であった。その後、美和の身を案じて母が寝込んでしまったことを聞き、ようやく迎えの兄にもなわれて家に帰っている。連れ帰った兄は「お前の伸びてゆこうとする芽をつむ結果になった」といつて慟哭した。美和はいわゆる当時の新しい女性女性の一人であったが、その父や兄も、新時代の教養を身につけた、知識階層に属する人々であった。美和は現在六十を越えているが、今日もなお、芸術を語り、文学を語り、また古在由重に私淑して、絶えず新しい時代に生きようと力めている女性である。恐らく若い日の美和は、新しい時代の生命そのままを生きているような、極めて魅力に富んだ女性であったに違いない。

一方、中村夫妻は恋愛結婚で一緒になったのだが、離村問題を境に、二人の間にはひび割れが生じかけていたようである。みさほを知る誰もがが様に口にするのは、「怜悧

な人で賢夫人であった」「潔癖ではっきりしていた」「いかにも教育畑の人らしく、ものに対して批判的であり、理的であった」ということばである。《長い間教員生活をしてきたこの人の言葉には、時折り冷めたくピリッと来るものがあつた》とは、塚原健二郎の自伝小説《ある迷宮の舞踏者》に出てくるみさほ評である。こう並べたててみると、みさほという女性の輪廓が略々浮き上ってくるようである。かつては中村の「村」に対する熱情に、黙々としてつき従っていたみさほであるが、家までなくした揚句、路頭に抛り出されてしまった一家の逆境を振り返ってみるにつけ、中村を見る目も、多分に批判的になつていたことと思われる。「亮平さんのやることは、子供っぽくて見てはられない」というのが、里方の兄達の中村評であつたが、彼女にもそうした批判に同調する気配が動き始めていたのかも知れない。妻のこうした目は《冷めたくピリツと》中村の心を刺し、それが両者の心の溝をますます深める原因になつたに違いない。妻との間に生じたこの疎隔は、離村の痛手の癒えない中村を、ますます絶望的な方向にかりたてたことであらう。

生田美和は、こんな状態にある中村の前に突如出現したのである。中村の心は急速に美和に傾いた。それに対し

て、《みさほは潔癖でハッキリしていた》人であつた。ここで夫婦の間には決定的な亀裂が生じた。生田美和に対する中村の求愛は、一方的ですさまじかつた。懐に薬品などを見せて、是非一緒になつてくれと懇願している。「幼かつた私は、申し出を断つたら、この人を殺してしまうのではないかとさえ思つた」とは、同女の述懐である。薬はいささか芝居じみているが、「村」に対する打ち込み方が異常であつたように、恋愛に対しても中村は狂熱的な表現をとっている。いかにも中村らしい行動で、薬は案外彼の本心だつたのかも知れない。

一方、美和についていえば、この恋愛に関し、彼女は全く受身の立場にあつた。女学生時代に中村の著書を読んでいた美和は、中村に対していくらかの関心を持っていたにしろ、それは結婚の対象としての関心ではあり得なかつた。

事実年令も大きく開いていたが、中村は病人のような顔色で、いつも無精髯を生やしていたから、実際の年よりも更にふけて見えた。着物は垢で光り、羽織の紐は紙縫りで間に合せていた。そんな中村の求愛は、若い娘の美和には実感として迫つてこなかつたようである。美和自身が動いていない上に、生田家の反対もあつて、美和は上京の手筈

を整えた。それは中村を離れて、彼の美和に対するほとぼりのさめるのを待つ目的と、美和が年来望んでいた絵の勉強を本格的にやってみたい念願の二つとであった。しかし美和をぜひ東京まで送りたいと出たまま、中村は再び会衆の小学校に帰らなかつた。

長野新聞・信濃毎日等、いくつかの新聞は『新しき村』に身を投じた中村が……とといった調子でこの事件を大きく扱い、中には『誘拐』の文字さえ使った。中村もまた公開状といったようなものを書いて応酬した。一訓導ではあったが、『新しき村』で話題をまき、近くは『椈の花』『荒野の光』『死したる麦』の著者でもあった中村は、一応地方にあっては名士だったわけである。殊に『荒野の光』は、発行以来二か月半で四版を重ね、ちよつとした話題の本でもあった。中村の履歴書を見ると、この事件の箇所は次のように記されている。

大正十二年五月三十一日 小学校令施行規則第二百二十

二条一号に依り休職

大正十二年七月二日 小学校令施行規則第二百二十六条

第二号後段に依り退職

なお第二百二十二条第一号とは、△傷痍ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リタルニ因リ職務ヲ行フニ妨アルトキ▽、第二百二十六条には、△市町村立小学校正教員左ノ各号ノ一ニ該当スルトキハ府県知事ハ之ニ退職を命ズルコトヲ得▽とし、その二号は△傷痍ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リ其ノ職に堪ヘサルニ因リ又ハ自己ノ便宜ニ因リ退職ヲ出願シタルトキ▽と規定している。本人に傷がつかないよう、いわゆる自己便退職の形をとって、履歴の辻褄を合わせたのは、校長竹中勝の中村に対する温情からであろう。

五

上京後の中村と美和が身を寄せたのは、千葉県遠野村三里塚に、一町歩程の土地を借り受けて農耕生活を営んでいた宮田富三郎の許であった。中村と宮田とは、かつて『新しき村』で一緒であった。宮田は『村』を出てから満州を放浪し、後に、ようやく此の地を安住の地として見出したのである。中村美和の談話によれば、宮田は内村鑑三の弟

子で、農耕による簡易生活を営みながら、ある時はトルストイを語り、ある時は讚美歌を歌うといったような、極めて魅力に富んだ人物であつたらしい。宮田は△合掌、こころでは拜みという、手を合せたような急な勾配に萱で屋根を直かに葺いて、四面を藁で囲んで、暗い、簡単な、掘立ての開墾小屋に住んで、ぼくぼく砂地の畑に、馬の歯という馬の飼料にする玉蜀黍などを植えていた。そして畑の合間に、星座の研究だの、ケーベル先生の小品だのというような本を愛読した▽（木村荘太『晴耕雨読集』）。木村荘太も震災直後、宮田につながる縁で三里塚に移り住んだ。また、信州大町出身の女教師小林勝江は、「新しき村」に入村を希望していたが、宮田の生活に共鳴し、後に宮田と結婚している。

三里塚には宮田の家のような掘立て小屋がポツリポツリ並び、互いに「相州」「信州」などと、その出身地を呼び名にして生活していた。師範時代「新しき村」時代と、再度の肋膜炎を病んで帰農生活が出来なかつた中村は、郷里の新聞に読みものを投稿して、わずかの資を得て生活していた。三里塚を離れなかつたのは、この地の生活費が格安だったからである。東京の生活も計画しなかつたわけでもないが、たまたま上京の車中で大震災に遭い、田端界隈で野

宿しただけで、また三里塚の生活に還つたりしている。

その後伝手を求めて、朝鮮に渡り、いわゆる外地訓導を志願したのは大正十二年の暮れであつた。手引きをしたのは中村に好意を持っていた会染時代の同僚、堀内義信であつた。堀内は中村より一足早く、彼の地にあつて教鞭を執つていた。渡鮮後の動向については、履歴書によると次の如くである。

大正十二年十二月九日 任朝鮮公立普通学校訓導 補

蔚山公立普通学校訓導ニ補ス。

十七級俸 慶尙南道

大正十四年三月三十一日

任全公立師範学校教諭補慶尙北道公立師範学校教諭ニ

補ス 十六級俸 慶尙北道

大正十五年八月三十一日 依願免任官

師範学校での担当科目は全学級の図画教科と、一部の国語科授業であつた。校長渡辺洞雲は、「当時、慶尙北道（大邱）の師範学校では図画教師を求めていた。たまたま、内地の文展にも比すべき鮮展に中村君が入選したので、早

速、本人に会ってみると、いわゆる師範臭のない、寡言温和の文化人であった。国語を担当してもらったのは、中村君が朝鮮の民話・童話の研究をしていたからである」と語っている。なお、朝鮮民話の研究は、後に『朝鮮童話集』一卷にまとめられた。大正十五年二月六日発行、四六版五百五十八頁、装幀清宮彬、挿画木村莊八、発行元富山房、なかなかの豪華本である。

朝鮮に渡る前、中村は信州に中村常雄を訊ね、渡鮮の決意を打ちあけている。松代の町にみさほの母を訊ねようともしているが、これは寄せつけられなかった。こうした行動は中村に取り纏う解りにくい部分であるが、朝鮮に家族を呼び寄せようとした事実（中村かほる談）もあるから、四人の子供と共に、再びみさほと一緒になろうとしたのかも知れない。もちろん、「潔癖でハッキリしている」みさほは、中村の申し出を受け付けようとはしなかった。みさほが子供達のために、中村を許そうとさえしたら、その機会はいくらでもあった筈だとは、中村美和の語るところである。亮平がその家族にひかれていたことは、美和に対する裏切り行為のように見えるが、事実は美和の方から家族のもとに帰えるよう、幾度か勧誘している。それは渡鮮以前から、渡鮮後にかけて、絶えず二人の間に繰り返されて来

た問題である。美和に深い愛情を持ちつつも、四人の子供を案じている中村の気色を察知する度に、美和は中村を妻子の許に帰えすべきだと、その決意を固めている。しかし、中村にその決断力の乏しいのを知ると、美和は自らの手で中村からの脱出を計った。脱出は幾度か試みられ、幾度か挫折した。病弱な中村の身のまわりの世和をしてくれる人を探し、一応は彼を納得させて上京したこともあったが、

『ヤマイスグカエレ』の電報で呼び返されてしまった。朝鮮海峡の往来が何回かに及んだことは、東京での再出発の途を講じた美和の経歴が、明瞭にその間の事情を語ってくれる。住み込み事務員、画商の家政婦、川端学校入学、築地小劇場研究所の入所準備等の事実がそれである。中村が信州にあった妻子を呼ぼうとしたのは、右に述べたような美和との進展のない生活の、そんなある日になされた事柄であろう。どうも中村という人物は、肉親への恩愛の情が人一倍厚かったが故に、またその人情に処する態度が女女しかったとも評することが出来るようである。

度重なる電報の効めがなくなった時、突然、中村は上京した。東京駅に出迎えた美和に、中村は手にしていた洋傘を投げつけて美和をなじった。その頃一内地人から、「前夫人を捨てた中村が、こともあろうに人の師になるべき師

範学校の先生になつてゐる」という文面の抗議書が、大邱師範と道庁学務課に届けられた。中村に好意を持ち、穩便にことを処理しようと奔走した渡辺校長に、中村は自分の方から辭職願いを提出した。これが履歴書にみる大正十五年八月三十一日付の依頼免官の内容である。ただし中村の上京は、辭令面より二か月程早い六月のことであつた。

明けて昭和二年の五月、美和は男の子を生んだ。ここで初めて、中村と美和との平穩な家庭生活の芽が育ち始めた。中村が四度、教壇人としてたつたのは、同年の九月十七日で、勤務先は豊多摩郡大久保尋常小学校、資格はまたまた代用教員、月俸も再び六十円であつた。履歴書によると、赴任の直後、十月三日付で戸山小学校代用教員、月俸六十円とあるが、これは校名の変更によるものと思われ。この頃、太平洋画会の画家石川寅治を通じて、クレパス会社々長佐竹林蔵を識り、佐竹の経営する学校関係の美術雑誌を編集し、これが機縁となつて著名な芸術家の知遇を受けるようになった。『白樺』につながる旧知の間柄に あつた草土社の岸田劉生・木村荘八・清宮彬・河野通勢・椿貞雄の外、新たに石井柏亭・片田徳郎・西沢笛畝・正宗徳三郎・小山敬三・織田一麿・恩地孝四郎・武井武雄等と交誼を深めている。したがつて、秀れた美術作品に接する

機会にも恵まれた。後に彼は数多くの美術啓蒙書を書いてゐるが、その便宜はこれらの人々から与えられたとみてよからう。また、晩学ではあつたが、太平洋画学校に入学して、長年働れていた絵の勉強を本格的に出来たのも石川寅治等が骨折してくれたものである。美和は當時を顧みて、「中村の生涯で、もっとも活気に満ち、明るい希望に溢れていた時期は、この時代だつたように思う」と語つてゐる。

中村が太平洋画学校を修了したのは昭和三年八月三十一日で、同日付で戸山小学校の図画教科の専科訓導に身分を変えている。多教科を受け持つて学級を経営してゆくよりも、少しでも画業に専念できる専科教員の方が彼には魅力だつたようである。昭和七年七月三十一日には、東京府立高等家政学校の図画教師の囑託を兼ね、月手当三十円を支給されている。越えて昭和九年十一月三十日の発令で、府立家政の専任教諭に任命された。もちろん、担当は図画教科である。月俸はよくよく縁の深い六十円であつた。収入は兼任当時より三、四十円の減俸ということになるが、減俸になつても、玄人としての芸術家に一步でも近づくことが中村にとっては何よりの喜びだつたわけである。

府立家政は昭和十七年四月一日、中野高等家政学校にな

り、更に二十一年三月三十一日をもって、都立鷺の宮高等学校と校名を変えている。その間昭和十二年三月三十一日より、二十二年一月三十一日に至るまでの十年間、中村は同校で書記を兼任している。この人事については、些か不可解な想いを抱かせられる。おそらく中村にとっても不本意だったのではなからうか。というのは、中村が一般教科を扱う訓導から、苦勞して専科訓導になり、更に四十五才で中等学校の図画教師になったのは、只管、雑用から逃れて、芸術に専心することに外ならなかった筈である。にもかかわらず中村が、自分の意に染まない書記の職を引き受けたのは、自分を図画の専任教諭にとつてくれた、校長清水福市の恩義に報いるためであった。絵に打込めることが無上の快心事であっただけ、それを恩義だと思ふ気持ちもまた深かったわけである。

清水は明治三十五年の長野師範卒業生であるから、中村にとっては大先輩ということになる。彼は長野師範を卒業すると同時に付属小学校訓導、郷里にあって教員義務年限を果たすと広島高等師範学校に入學し、同校を卒業すると、直ちに京都府の視學になつてゐる。視學就任は三十六才で、異数の出世といわれた。その後も教育行政面に敏腕を振るひ、八十七才（昭和四十三年現在）の今日も、大妻女子

大学の理事として活躍している。中村とは一面識もなかったが、県人会の席上で中村と識り合い、三年程の覬察期間をおいた後、中村という人物の誠実さを見込んで採用したのであつて、その前歴など考えても見なかつたとは、清水の談話である。中村にとっては、絵に専念できることは半生を懸けての執心事であつたのだから、その望みを遂げさせてくれた清水の頼みは断られなかつたのである。教育行政のやり手であつた清水にとつてみれば、全財産を「新しき村」に投入しながら、終生、それを口にしなかつたような中村の性格を見抜き、秘書的な役目を帯びた書記職への就任を中村に要請したものであろう。

今日、われわれが考へている書記という仕事は、目立たない地味な職域である。まして、教諭で兼任ということになると、無能な教師としての座から、陽のあたらない場所への追ひ落し工作のように見えるが、中村の場合はむしろその逆であつた。

中村が書記を勤めた昭和十二年から、二十二年までの間は、戦争を挟んで、学校経営にはもつとも多難な時代であつた。軍工場への勤勞動員についての事務処理、配給物資の公正な割り当、労賃支給に関する会計事務、勤勞学生の健康管理等、問題は山積してゐた。それに鷺の宮高校は戦

災を被って焼失し、復興は都の対策・計画を待っていたのでは、いつ埒があくか分らない時代であった。都庁・都議会への運動はもちろん、寄付金集めに駆け廻ることの一切は書記の仕事であった。学校の焼けた晩から、何日か徹夜が続いた。彼の熱意は学校を再興することにしかなかった。しかし、学校の出来上った時には、半歳に亘る肺結核との闘病生活中で、立ち上ることは出来なかった。竣工した校舎の写真を、褥中で眺めながら中村は死んでいった。「亮平は校舎の再興と自分の命とを引き換えにした」と、美和は回想している。私は先に、中村が書記を解任されたのは昭和二十二年一月と記したが、既にその頃は宿痾の結核で再起不可能だったわけである。中村の死期を早からしめた直接の原因は、上記、鷲の宮高校の復興に精力を尽瘁したことであるが、彼を死に追いやったもう一つの原因は、長い年月、異様な熱意を傾注していた著作生活であった。毎日の授業の上に、学校復興のための事務長のような役目を背負い、その上での執筆生活であったから、いきおい夜中の二時、三時といった時間まで書き続けていた。特別にその方面の教育を受けてもいなかった中村が、参考になる写真、図録も皆無に近かった当時、ともかくあれだけの著作点数をものにしたということは、並大抵の努力とは

思えない。中村と生活を共にしたこともある西島麦南は、「毎日キッチンキッチンと時間割りをたてて努力するような辛棒家であった」と評している。また中村美和は、その徹底した勉強振りについて、次のように語っている。

何等かの形で、いつも勤めを持っていた人だから、美術関係の執筆も夜中の二時というような時間をそれにあてていた。ともかく、無駄な時間を持たない人で、食事の時からトイレに立つ時、はじめて新聞を読むというような人であった。私と話す時間も余りなかった。ペンを紙上についたまま眠りこむようなことも度々であった。それで朝は、五時、六時になるとパツと起きてしまふというふうであった。晩年は美術関係の会に、二つ三つ関係していたが、帰宅すると机に向かって、必ず読むか書くかして、決してそのまま寝てしまふようなことはなかった。日曜日ばかり入れ時だといって、終日机に向かっていた。

中村の著作『柀の花』、『荒野の光』、『死したる麦』、『朝鮮童話集』については、既に触れたところであるが、府立家政に着任以来の著作も十数冊に及んでいる。はっきりし

ただのだけを列挙してみると次のようになる。

六

朝鮮慶州の美術	昭四・八	京都芸艸堂
日本美術の知識(上下)	昭七	改造文庫
東洋美術の知識(上下)	昭九	改造文庫
対象世界美術年表	昭十三・六	芸艸堂
堂・塔・構成	昭十三・十二	仏教美術堂
仏像の鑑賞	昭十四・九	宝雲社
満州の美術	昭十六・七	宝雲社
日本美術考	昭十七・十	宝雲社
日本美術史	昭十九・五	文修社
アメリカの美術	昭二十二・五	東亜出版社

他に『世界美術読本・西洋篇』、『ニール河の草』などの著述があったようであるが、確かめ得られないでいる。なお、『東洋美術の知識』は、昭和五年十二月、厚生閣書店発行の単行本を文庫本に改装したものである。

中村亮平が美術評論家とよばれる所以は、前章に挙げた数多い美術関係書の著者だからであるが、それらの書物は、本格的な研究書でも高邁な美術論を展開したものでもない。いわば、啓蒙的な入門書の域を出ていない書物ばかりである。木村荘太は『魔の宴』(昭二十五・五月刊)で、『村』を出した中村は、後に美術紹介者になった『と書いて』。木村も中村の著作に、思想性や批判の目を認めなかったからであろう。もとより、啓蒙書の出版も、それはそれなりに、充分意味はあった筈である。紹介者とはいっても、入門階程の書物が数少かった当時であったは、なかなか貴重な仕事をなし遂げたことになる。朝鮮・アメリカ・満州の美術紹介も見過すことは出来ない。特に戦争のさ中(昭十六年)、実地踏査の裏付けによってなされた『満州の美術』の苦心も買わねばなるまい。だが、中村という人物は、啓蒙家では満足できない人間であった。いつも一流を目指し、孜孜として努め励んでいたのではなかるうか。ただ、彼にそれだけの学識と教養がともなっていなかったただけである。学識・教養の欠如とはいっても、それは中村の才能の責任ではなく、彼の辿った環境——農家に生まれ、

学校教育も充分に受けていない——によるものである。
『紹介者』といわれることは、あるいは彼にとって不本意であったかも知れないが、『紹介者』になり得たことは、彼の持っていた可能性を最大限に開花させた姿だと見られる。

中村の残した著作のうちで、その本領を遺憾なく發揮している仕事は、『対象世界美術年表』である。菊版五百八十三頁に、十七枚の図版を入れた大冊で、微細克明、入念を極めた労作である。当時の古本屋を漁り、老大な資料を駆使して完成したものである。殊に索引については、文字通り彫心鏤骨の苦を嘗めており、仕事は夜を徹して続けられた。中村の視力が衰えたのは、この仕事の後からである。彼の手許に保存してある図書には、増補の日のための書き入れがびっしりとなされており、如何にこの仕事に彼の生涯を賭けていたかが窺われる。「根気は世界の誰にも負けないと自負していたあの仕事こそ、中村にはもともと相応しかったのではあるまいか」というのが、夫人の回想である。本稿の初めに、中村の手になる『新しき村』信州支部の記録が、如何に正確で丹念であったかについて述べた。入村後の中村の仕事は、『村』の『ニュース』発行と会計係りを受け持ったが、その仕事振りも誠実であり、綿密を極めていた。かつて石河内の村民が中村を『村』の人は気

分屋で、あてにならない人が多かったが、中村だけは信用できた」と語り、渡辺洞雲も「仕事に几帳面で誠実の人」と評している。さきに清水福市が、中村に府立家政の書記になることを懇請したと述べたが、誠実な中村の本質をよく見抜いた上での人事といえよう。

中村が著述になみなみならぬ執着を持っていたことについて、次のような挿話が伝わっている。学生の頃、教わっている先生の家に遊びに行った中村は、そこに夥しい蔵書を見て、「俺もこうした本を書けるような人間に是非なりたい」としみじみとした口調で語ったことがある。感慨深かげに洩らした彼のこの言葉は、聞く者に妙に鮮明な印象を与えたと中村常雄は言ったことがある。些細な想い出話が、何年も中村常雄の脳裏に残っていたということは、その日の亮平のとった姿勢の中に、聞き流してしまえない真剣さが吐露されていたに違いない。亮平を語るこの話は、彼を理解する上に、極めて象徴的な挿話である。その意味で、後になって書かれた十数冊の著作は、若い日の彼の願望の結実とみるべきであろう。

中村美和も語っていることであるが、中村亮平という人物は、知識階層に対する憧憬が、人一倍強かった人のようである。私は前に、中村の生家はせいぜい中農程度の農家

だと述べたが、その程度の農家の、しかも後継ぎが、明治三十年代の時点で上級学校へ進学するということは一寸考えられない事柄である。小学校時代に精勤賞こそ貰ったが、特にずば抜けた秀才であったとも聞いていない。農家を継ぐことは性に合わないなら、職人か商人か、さもなければ村役場、郵便局、駅員などの途を選ぶのが農家の子弟の迫るコースである。それを小学校卒業後六年も空白をおいて、ようやく師範に入学しているという事は、入学に到るまでのさまざまな曲折と、彼の執心の根深さを物語っている事実である。そんなにもして彼を師範入学に駆り立てていたものは、さきに記した、何とない知識階層への憧れだったかと思われる。信州という処は、学校の先生になることが、知識階層を代表するもっとも手近な聖職と考えられている土地柄だったからである。

師範に入学することによって、中村亮平を支配していた憧れの世界は、序々に具体化され固定化されていった。彼を虜にしたその憧れの権化が、芸術であり、美術であった。長野師範の評点原簿に記入したある中村亮平の成績表（第四学年）には、学力評語は「乙」とあるが、図画教科だけは評点百になっている。図画を得意とする中村が美術に傾倒したことは当然であるが、その傾向に拍車をかけたの

が雑誌『白樺』の出現であった。『白樺』の創刊は中村が四年生になった明治四十三年の四月である。明治四十三年という時点において、『白樺』を見ていた長野師範生がボツボツいた事実から推測して、中村の目に『白樺』が触れなかった筈はないであろう。その『白樺』が、美術に対する中村の執着と信仰の裏付けになり、武者小路への讃仰につながってゆくのである。『小さな河』の中に、中村と塚原が連れ立って、¹村²から上京していた武者小路を訪問する場面がでてくる。そこには、ロシヤ文学の重訳を手掛けた水島直昭も同席していた。武者小路の周辺に漂う芸術的な雰囲気の中にあつて、中村は平生と違い、妙に浮々していた。塚原にはそんな中村が軽薄にさえ見えた。塚原はまた中村について³が年の教師生活から解放されて、芸術家のなまかに一歩近づいたよろこびをかくせないのだと思つた⁴とも書いている。いかにも中村にありそうな姿をよく観察している。

同じく、『小さな河』の中で、塚原は中村の絵に対する感想を次のように述べている。

その絵は、黄色い絵の具をふんだんに使つた山の写生が多かつた。私は、これがその頃さかんだった草土社

風なのかと思つたが、私には、そこからふきのぼつてくる生命感というよなもののをうけとることはできなかった。

黄色い絵の具がふんだんに使われていたのは、当時信州の各地で開かれていた『白樺』の複製画展覧会の影響であつた。印刷技術の幼稚であつたそれらの絵は、原画とは大分違つた、くすんだ黄色や褐色が画面に溢れていた。中村亮平の黄色い絵の具というのは、この複製画の黄色を真似たものである。塚原は中村の絵を、《生命感》が稀薄だと評しているが、絵画に一家言を持つている美和夫人も「中村の絵は決してうまくなかつた。彼の中にある常識家が、彼の描く絵にいつも邪魔をしていた。いたずらに克明ではあつたが、流動性には乏しく、絵には大變打込んでいたが、力量は疑問だ」と言っている。そうなつてくると、師範生時代の図画の成績は、その芸術性にあつたのではなく、技術の上での百点ということになる。もし、中村の画家がその程度のものだとすれば、彼は生涯を絵画に賭け、絶えず精進はしていたが、天分には恵まれていなかったといふことになる。天分はなかつたが、美術なるものの実体に、少しでも近づきたいという願いが熾烈だった人である。

そしてここでも、中村の願つた世界と、彼に与えられた天分のギャップを埋めるべく、生涯にわたつて異常な努力が傾注されている。芸術の世界で精進がものをいうのは、前提として天分が要求される筈であるが、その前提を欠きながら彼は律気な努力を続けたのである。芸術に対するそうした傾注振りには、時には「求道者」「殉教者」の姿にも見えた。「中村は偉かつた」という評価はここから生まれている。しかし一方、芸術の才能を欠きながら、芸術に打込んでいる姿ほど痛ましいものもない。中村はその痛ましい人であつた。芸術の世界に少しでも近く、その身を置いてみたいといふ中村の念願は、府立家政の図画教師になつたことで、一応の望みは遂げられたことになるのだが、彼はその地位に安住していることはできなかった。彼の才分を遙かに超えた、一流の画家を夢みて、血の出るような精進を続けていたのである。このことは、一流の美術評論家を志しながら、啓蒙書を書いて、結局は「美術の紹介者」にすぎなかつた事情と、相通じることがある。

ただ、一言付け加えておきたいのは、中村が一図画教師として満足していなかったことが、そのまま教師としての勤めをないがしろにしていたといふことではない。むしろ教師としては教え子をよく可愛がり、その誠実な勤務振り

と、求道者の持つ雰囲気とによって、多くの生徒から慕われ、父兄の信任もまた厚かった。中村に寄せられている生徒の書簡は、尊敬の域を超えて、信者と呼ぶのが相応しくさえある。没後も、月々の命日に中村家を訪れていた生徒もいたし、二十年を経た今日になっても、毎夏、墓参に信州の中村美和を訪う教え子もいる。「教職は、パンのためだ」といながらも、教師としての資質は、レベルを遙かに超えていた。中村は性に合っていた緻密な仕事を捨てて広潤な芸術の世界を望み、教師としての天与の職分に安住せず、芸術家を夢みていたのである。

『小さな河』に、松代小学校時代の中村訓導を語っている箇所がでてくる。

中村は教師としても、村の思想の実践者だった。掃除当番が、掃除が終わったといえ、そのまま帰した。決して、生徒のいるところで掃除のよしあしをしらべるとようなことはなかった。彼は、生徒をかえしたあとで、ひそかに教室をしらべて、もしごまかしや、不十分があれば翌日、それとなく注意し、反省させるという方法をとった。他人に物をおくる時は、自分の不要のものでなく、一ばんだいじなものをおくらなければ

いけないとよく私たちの前でいった。そして、それを
実行する人であった。

また、中村の日向行きを記念して、彼の個展を開こうと、塚原は適当な会場を探しめぐねていた。そして、町の公会堂を管理していた料亭佳月の主人に相談してみた。

主人は中村の名をきくと、とたんに態度が変わり、中村先生の会なら、会場費はいらないといくださったのだ。それはまたなぜですかと、びっくりしてきくと「はじをお話しようですが、二男坊のやつが、どうも勉強ぎらいで、通信簿は、丙とおしどりはかりでした。これもこんな商売をしているからと、あきらめていたんですが、四年生になって、中村先生の組になってから、きゅうに変わりました。親の口からいうのもなんですが、近頃は、もうどこへだしたって、りっぱな生徒です。一ど先生にお礼を申し上げたいと思っていたところでした。どうか、何日でもおつかい下さい」と佳月の主人は話しているあいだも、もう、感情をおしつっんでいることはできないというようであった。私は、味方はこんなところにもいたと思った。そ

して今さらのように生活者としての中村に感心した。

現、鷲の宮高校がまだ府立家政といわれていた頃から同僚であった鈴木豊子は、在任当時の中村の想い出を、こんなふうに語っている。▲生徒を非常に可愛がった先生である。言葉数も少なく、もの静かで大きな声もなかった。生徒に向かっても、「こういうことだろうか」とは言っても、「分ったかね」とは言わない方であった。考えるタイプの人とでもいえようか。いつも、消え入るような寂しさを漂わせていた先生であった▼。また、その家庭生活については、▲旦那様と奥様という感じではなく、一つのもの育てる協力者といった感じであった。お年も違っていたためか、奥さんへの思いやりに心をくだかれていて、あんなだったら、どんな女性でも先生に傾くだろうと思った。先生は、その死の間際まで、美和夫人の絵を描き続けておられた。奥さんもまた、牀の弱い先生をいたわられることは大変なもので、常に先生のお好みのタイプに自己をつくり変えてゆこうとされていた。二人は精神的に結びつけられていた夫妻だったかと思われる▼。

府立家政から、鷲の宮高校時代について、中村美和の回想は次のように続く。「私達に子供が生まれてからは、私

の彼に対する愛情も育った。しかし、私も彼もそのためにまた苦しみもした。中村の勉強、勉強、書く、書くといった生活は、自己の行為に対する償いの心算だったと私は解釈している。別れた子供達に対する中村の気持が、彼を勉強に追いつけていたことと思う。後の話であるが、別れた子供がその学生々活を同じこの東京で送っていると聞いた中村は、子供が身を寄せていた母方の伯父の家の周囲を、廻り歩いていた夜もあった。彼の努力は、彼の性格からみてもいるが、彼の苦しみの償いではなかったろうか。しかし、また、私や子供のことを案じてくれる気持も人一倍であった。私もこれ以上尽してやれない程彼には尽した。中村は私にとって最高の良人である。私は彼との生活を、金の額縁に入れてそっとしておきたい」。

中村亮平に対して、▲消え入るような寂しさを漂わせていた▼という批評と共に、若い日からの中村を知る何人かの人は、「純粹の人ではあったが、晩年は少し違ったよいうだ」という人物評が一方にはある。これだけ波乱に富んだ半生を送ったのだから、▲違った▼のは当然であるうが、聞きようによっては、晩年は不純になったと言っているようでもある。もし不純とか、政治的という意味ならば、私はその解釈に賛同できないものである。▲若い時の

中村は、人を疑ったり、▲憎んだりすることのできない人だと思つた。見方によれば世間知らずとも見えるが、その白紙のような純粹さは、村の思想の実践者として、かぎりなく立派に見えた▼ ▲人類に愛された最初の土地で、▲ 鋏を持って働くことに、大きなよろこびを感じている。……そういう時の彼の目は、きらきらと熱っぽくかがやき、それが、私には、たいへん美しく思われた▼ (「小さな河」というふうな印象を人々に与えていた。つまり率直で穢れを知らない情熱家であつた。それが晩年、寡黙で静謐で、そして瞑想的な人柄になつていたこともまた事実である。だからといつて、瞑想的になることが「純粹であつたが」といふ、逆説表現として成立し得ないことは勿論である。中村が交つたといふ評価は、書記になつて学校経営者のふところ刀のように見えたり、学校の復興問題に献身的に奔走し歩いている姿が、彼の若い日に較べて、ある時は不純に、ある時は政治的に人々の目に映じたのではなからうか。しかし、昼間の学校人としての彼が、彼の本態でなかつたことは、教師として、家庭人として、著作家としての中村に想いを到せば、すぐはつきりするところである。この点、中村は「寂しさを漂わせていた人」と言つた、前記、鈴木豊子の評が當つてことになる。そして、中村の漂わせ

ていた「寂しさ」の実体は、あまりに大きすぎた「新しい村」運動の挫折と、苦悩の上に築かれたその結婚生活とが昇華し結晶されたものかもしれない。

中村亮平の亡くなつたのは、昭和二十二年七月七日で、寝つてから約半歳、死因はやはり肺結核であつた。享年満六十才。芸文院美文亮道居士というのがその戒名である。墓は美和の郷里と、中村の生まれた、現戸倉町五加の二箇所にある。中村が生徒として、教師として母校へ通つた道路わきの、冠着・飯綱・黒姫・戸穰の山々を遠望できる地点に建つてゐるのが五加の墓である。碑名には、前夫人みさほの欣浄庵釈尼妙美正定尼という戒名もならんで彫られてゐる。

みさほは、昭和三十八年七月四日に、七十二才で亡くなつてゐるから、亮平の没後、十六年間長らえたわけであり、亮平の祥月命日に三日先立つて永眠したことになる。

註

- (1) 『地上』の発行者、諏訪交響楽団の創立者。
- (2) 現在、日本女子大学学長。
- (3) 『地上』の一部同人によつて企てられた理想の学校を指すが、実現はしなかつた。

(4) ベルギーの新しき学校(アドルフ・フェリエル)新しき
学校(バスコンセロ)

(5) 学童の意。

(6) 後、京城帝国大学学生課長。

本稿を草するに当って、

中村美和・西島麦南・中村義郎・中村かほる・中村 観・
中村一雄・高橋忠治・田中嘉忠・塚原亮一・横沢茂・渡辺
洞雲・山室静・鈴木豊子(順不同)の諸氏

に大変お世話になりました。厚くお礼を申し上げます。